村上春樹「哈那雷灣」論
—母子關係的象徵性—

楊琇媚

台灣　南臺科技大學應用日語系　副教授

摘要

「哈那雷灣」發表於 2005 年 4 月號的『新潮』，之後收錄在 2005 年 9 月發行的短篇作品集『東京奇譚集』(新潮社)，是為該作品集的第二篇作品。小說中出現日裔警察 Sakata 與前美國海軍隊員，而且 Sakata 也提到了二次大戰時在歐洲戰死的伯父。筆者認為這些話題並非作者無意義地寫在作品中。因此，本論文著眼於夏威夷這個小說的舞台，以日本與夏威夷的歷史背景為出發點，試著解讀以母子關係為主軸的「哈那雷灣」中所隱藏的社會文化符號。村上春樹透過描寫母子這種言語無法表達的宿命關係，讓讀者想起因國家進步而逐漸被遺忘的人民與國家之間的羈絆。而由此點來看，「哈那雷灣」正是象徵著村上春樹文學中的社會責任的作品。

關鍵字:哈那雷灣，夏威夷，日裔，美國，母子關係

受理日期:2020 年 08 月 25 日

通過日期:2020 年 10 月 23 日

A study on the" *Hanalei Bay*"of Haruki Murakami: The symbolism of mother and son relationship

Yang, Hsiu-Mei
Associate Professor, Department of Applied japanese, Southern Taiwan University of Science and Technology, Taiwan

Abstract

"***Hanalei Bay***" , published by Shincho in its 2005 Aprils edition, was the 2nd article included in Shinchos 2005 Septembers Short Story Collection "Five Strange Tales from Tokyo".A Japanese policeman Sakata and one American ex-Navy officer appeared in the story. Sakatas uncle who died in Europe during World War II was also mentioned.I believes that these characters and events are not random but significant in this story.Therefore, this article focusing on Hawaii, the stage of the story and based on its historical background of Japan and Hawaii, attempts to understand the hidden social and cultural symbolism through the mother and son relationship, the main theme in "***Hanalei Bay***".The conclusion is that Haruki Murakami intends to draw the readers' attention to the tie of the nation and the gradually forgotten people through this mother and son relationship – fate that is indescribable. Judging from this, "***Hanalei Bay***" is no doubt the representation of social responsibility in Haruki Murakami's work.

Keywords: Hanalei Bay, Hawaii, Japanese descent, The United States, Mother-child relationship

村上春樹「ハナレイ・ベイ」論
―母子関係の象徴性に着目して―

楊琇媚
台湾　南台科技大学応用日本語学科　准教授

要旨

「ハナレイ・ベイ」は、「東京奇譚集」と題する連作短編小説の一編として『新潮』2005 年 4 月号に掲載され、後に 2005 年 9 月刊行の短編集『東京奇譚集』（新潮社）の 2 作目に収められた。作中に登場する日系人の警察官サカタや元アメリカ海兵隊員、さらにサカタの伯父がヨーロッパで戦死した話などは、意味なく書き加えられたものではないように思われる。よって、本稿では、作品の舞台がハワイであるという点に着目し、日本とハワイにおける歴史的背景への考察から出発しつつ、母子関係を軸とするこの作品に隠された社会・文化的な記号を読み解くことを目的とする。本稿での考察により明らかになったのは、村上春樹が、母子という言葉では言い表せない宿命的な関係を描くことで、国家と国家の中で忘れられつつある国民の間の絆を想起させようとした、ということである。その点では、この作品は村上春樹文学における社会的コミットメントをまさに象徴する作品であると考えられるのである。

キーワード：ハナレイ・ベイ、ハワイ、日系人、アメリカ、
母子関係

村上春樹「ハナレイ・ベイ」論
―母子関係の象徴性に着目して―

楊琇媚
台湾　南台科技大学応用日本語学科　准教授

1．はじめに

村上春樹の短編「ハナレイ・ベイ」は、「東京奇譚集」と題する連作短編小説の一編として『新潮』2005 年 4 月号に掲載され、後に 2005 年 9 月刊行の短編集『東京奇譚集』(新潮社)の 2 作目に収められた。この作品は、主人公サチである息子テカシが、ハワイ・カウアイ島のハナレイ湾でサーフィンをしているときに、亀を追って湾に入ってきたサメに、右足に食いちぎられ、そのショックで溺れ死んだ、といった場面から話が始まる。サチは息子を亡くして以来、毎年、彼の命日の少し前にハナレイの町を訪れては 3 週間ぐらい滞在するようになり、こうしたことがもう 10 年以上続いていたという。そんなサチが、ある日、日本からサーフィンをしにきたという若者二人にハナレイで出会う。第一印象は頼りなさそうな彼らであったが、サーフィンをしているときの姿は打って変わって、「とても生き生きとして」（p72）おり、「自信に満ちていた」（p72）。また、サチは、こうした若者二人がサーフィンに熱中している様子に、死んでしまった息子を重ね見た。そして、何日か後に、サチはハナレイの町で再び、若者二人に出会ったが、そこで、彼らから「片脚の日本人のサーファー」（p87）を見かけたという話を聞いた。サチは、彼らが見たのは死んだ息子だと直感した一方で、「どうして私には息子の姿を目にすることができないだろう」（p89）と思い、涙する。そして翌日、サチは「何はともあれ自分がこの島を受け入れなくてはならない」（p90）と考えるようになり、「健康な一人の中年女性として」（p90）ハナレイを去るのである。

つまり、この作品は、押野武志が述べるように、「十九歳で亡くな

った一人息子に対する、サチの鎮魂の思いが、本作品のモチーフとなっている」[1]のである。ただ、先行研究においては、本作品を独立した一つの作品として論ずるものは管見ではなく、『東京奇譚集』に収録された5編を同時に論ずるものがほとんどである。さらに、同作に対する論評としても、生前の息子との関係を中心にサチが過去を振り返りながら、死後の息子との関係をいかに再構築したか、という読みが主流である。例えば、重岡徹は「サチは母親としての『資格』に欠けていたこと、その結果息子に復讐されたことを『受け入れ』、その上で『健康な一人の中年女性』としてこの日常を生きていこうとする」ものだと述べた上で、「二人組のうちずんぐりが息子の『身代わり』(「アイロンのある風景」) として、サチに小さな救いをもたらしてくれる」[2]としている。また、津久井伸子は「母『サチ』は息子を避け、息子から逃げ自分から逃げてきた。その『サチ』が、息子の死んだ今そのことに思い至り、息子に向き合い自分に向き合おうとしている」とした上で、「結局『サチ』に必要だったのは、『サチ』の中で新たに像を結んだ、新しい『タ(ママ)カシ』を発見することであり、それによって、『ありのまま』の自己をも発見することであった」[3]と、息子との関係を再構築することにより自己発見も果たしたのだ、としている。

こうした先行研究の主張に対して、稿者も大いにうなずく点は多々ある。ただ、作中に登場する日系人の警察官サカタや元アメリカ海兵隊員、さらにサカタの伯父がヨーロッパで戦死した話などは、決して意味なく書き加えられたものではないように思われる。また、村上春樹は2018年8月27日に行われた『ニューヨーカー』のインタービューで、次のように話している[4]。

---

[1] 村上春樹研究会他編『村上春樹　作品研究事典(増補版)』(鼎書房、2007.10) p 274

[2] 重岡徹「村上春樹『東京奇譚集』論」(『別府大学国語国文学』2006.12) p 27

[3] 津久井伸子「村上春樹『東京奇譚集』―家族という呪縛―」(『宇大国語論究』2007.3) p18

[4]「HARUKI MURAKAMI ON PARALLEL REALITIES」
https://www.newyorker.com/books/this-week-in-fiction/haruki-murakami-2018-09-0

感情的な傷には3つのタイプがあります。直ぐに癒える傷、癒えるのに長い時間がかかる傷、そして死ぬまで残る傷です。物語の重要な役割の一つは、可能なかぎり深く、可能な限り詳細に、その残っている傷を探ることだと思います。なぜならそれらの傷は、良かれ悪しかれ、人の一生を定義し、形作るものだから。そして物語は、それが効果的な物語であれば、傷の居場所を正確に示し、その領域を定義し(傷ついた人は、それが存在することに気づいていないこともしばしばあります)、そしてそれを癒すために働きかけることができます。

そこで、稿者は、作品に登場する人物や先に挙げた村上自身の発言を踏まえて、作品の舞台がハワイであるという点に着目し、同作を論じたい。具体的には、日本とハワイにおける歴史的背景への考察から出発し、母子関係を軸とするこの作品に隠された社会・文化的な記号を読み解くことにより、村上が述べた「死ぬまで残る傷」とは何かを明らかにするのが、本稿の目的である[5]。

2. なぜハワイなのか―日本とハワイとの運命的なつながり

ハワイ州はアメリカ合衆国に最後に加盟した州であり、アメリカ合衆国で唯一、州全体が島だけで構成されるといった地理的性格も有している。太平洋の中央に位置し、自然豊かな景観や暖かな熱帯性気候により、いわずと知れた世界的な観光地である。もともと独立王国であったハワイは、1893年に王権が倒され、翌94年にハワイ共和国が設立された。その後1898年にアメリカに併合されて、アメリカ領土となり、1959年にアメリカ50番目の州となった。このように、数奇な運命をたどるハワイは、日本と6,000kmも離れてい

3（2020年8月13日最終閲覧）。なお、日本語訳の引用は「村上春樹のパラレル・リアリティ（NEW YORKERインタビュー翻訳）https://note.mu/masatonic/n/nc43379f7598c（2020年8月13日最終閲覧）によるものである。

[5] なお、この作品も映画化され、2018年10月に公開された。ちなみに、映画では、サカタという男性日系人の警察官は日系ではないアメリカ人男性警察官に変えられており、また、戦争に関わる話も一切削除されている。

るものの、明治維新以後の日本と切っても切れない関係にある[6]。

佃陽子によれば、日本は「19 世紀末から 1970 年代前半までは、アメリカ大陸を中心に多くの『労働力という商品』を輸出していた移民送出国であった」[7]という。また、佃はハワイにおける日本人移民史について次のように述べている[8]。

> ハワイへは、1885 年の日本政府の斡旋による官約移民に始まり、その後民間会社による私約移民あるいは自由移民、家族の呼び寄せを経て、1924 年に日本人のアメリカへの移民が禁止されるまで、合計約 20 万人を超える日本人が到来した。その多くはサトウキビプランテーションで農作業に従事する低賃金労働力となった。日本人移民労働者の中には、金を貯めて「錦衣帰郷」した者やアメリカ本土へさらに移動する者もいたが、結局約 10 万人がハワイに残った。

そして、こうした移民現象を引き起こした理由の一つとして、増大の一途をたどる人口問題への対処があると考えられる。寛政 12(1800)年に約 2,551 万 7,000 人だったとされる日本の総人口は、明治 31（1898）年には 4,371 万 6,400 人へと、100 年弱の間に 1.7 倍も増加した[9]。このように、短期間での人口増は、生活資源の不足をもたらし、農村も重大な貧困問題に直面することになる。そして、人口問題を解決するために、福沢諭吉も日本人の海外移民を提唱した[10]のである。つまり、ハワイへの移民は、こうした移植民政策に発端を成すものなのである。このような時代背景から、作品の最初

---

[6] ハワイの詳しい歴史については、矢口祐人『ハワイの歴史と文化』（中央公論新社、2002.6）を参照されたい。

[7] 佃陽子「ハワイにおける現代の日本人移住者の移動性と「移民性」」（『教養論集』2015.3）p43

[8] 前出「ハワイにおける現代の日本人移住者の移動性と「移民性」」p43

[9] 張素玢『未竟的殖民:日本在臺移民村』（衛城出版、2017.6）p40-p41

[10] 天沼香「福沢諭吉の移民観：その女性観と関連させながら」（『東海女子大学紀要』1988.1）を参照。なお、張素玢（前出『未竟的殖民:日本在臺移民村』）によれば、福沢諭吉、中江兆民、神田孝民などの思想家はトマス・ロバート・マルサスの『人口論』により、西洋の植民思想に注目するようになったため、当時（明治期）の日本社会が直面する経済問題を解決する手だてとして移植民政策を提唱したという（p42）。

に登場する日系人の警察官サカタは、これら移民者たちの後葉であることとも推測できよう。

さて、ここで注目したいのは、サカタが語った、彼の伯父が 1944 年にヨーロッパで「日系人で作られた部隊の一員として、ナチに包囲されたテキサスの大隊を救出に行ったとき、ドイツ軍の直撃弾にあたって」（p59）戦死したといった話である。1944 年といえば、第 2 次世界大戦の終盤の時期で、その歴史をさかのぼれば、「日系人で作られた部隊」とは、おそらく第 2 次世界大戦中にアメリカ陸軍が有した部隊である、いわゆる第 442 連隊戦闘団のことと推測できる。ほとんどが日系アメリカ人で構成されたこの部隊は、日系アメリカ人二世の志願兵で構成され、アメリカ合衆国の旗の下、当時の日本の同盟国であるドイツの軍隊と戦うためにヨーロッパ戦線に派遣され、数々の激戦をくぐった部隊である [11]。だが、敵対するドイツと同盟関係にある日本の、その血統を持つ当時の彼らは、アメリカに属する部隊の中において、まさに板挟みの状態に置かれていたことが想像できよう。そして、こうした点から、日系人ないしは日本人が背負っている“（戦争推進国の国民としての）原罪”を提起したいという村上の意図がうかがえるように思われるのである。

一方で、サカタの伯父らは、日系アメリカ人として、自分たちがアメリカ社会に容認されるべく、自ら進んで第 442 連隊戦闘団に加入したことは十分に考えられる [12]。ただ、結局彼は戦争によってヨーロッパで命を落とすこととなったのである。彼らの祖先は、貧困な運命を変えるべく、海を渡り、ハワイにやってきたわけであるが、子孫たちが後に祖国が引き起こした戦争に巻き込まれるといった運命をたどるとは予想もしなかったであろう。こうした背景から考え

---

[11] 第 442 連隊戦闘団や戦時下のハワイの日系人については、前出矢口祐人の『ハワイの歴史と文化』を参照されたい。

[12] 矢口祐人によれば、「移民の本格化から半世紀を経て」「ハワイ経済に不可欠な存在となっていた」日系人は、戦争が始まると、信頼できない『敵国人』とみなされた（p83）」にもかかわらず、「積極的にアメリカ軍に志願した（p93）」という（前出『ハワイの歴史と文化』）。つまり、彼ら日系人はアメリカに対する愛国や忠誠を示すために従軍したのだと考えられる。

ると、サカタがサチに語った「大義がどうであれ、戦争における死は、それぞれの側にある怒りや憎しみによってもたらされたものです。でも自然はそうではない。自然には側のようなものはありません。（中略）息子さんは大義や怒りや憎しみなんかとは無縁に、自然の循環の中に戻っていったのだ」（p59）といった話は、同じく日本人であるサチに対する単なる、自身の伯父のように人間自身が引き起こした戦争や、それに伴う怒りや憎しみに巻き込まれずに、自然の力によって死を迎えられた息子は幸運である、という個人的な慰めの言葉ではないように思われる。

サカタの祖先ないしは戦死した伯父は日本政府の移民政策という国策下の犠牲者であると言える。したがって、彼がわざわざ戦争で亡くなった伯父の話をサチに持ち出したのは、つまり、数十年前に遠く 6,000km も離れた日本からやってきた彼の祖先や戦死した伯父への思いや労わりのためでもあると考えられる。サカタにしてみれば､祖先や伯父が払った犠牲の上に自分や家族があるのではないか。このことから考えれば、ハワイという舞台設定や日系人警官の登場はそうした歴史的な記憶を喚起させると同時に傷や苦痛 [13]をも想起させる作者の意図があるように思われる。

では、作品に込められた「死ぬまで残る傷」を考えさせる、もう一つの場面を見てみよう。サチはハナレイ滞在中のある日、行きつけのレストランでピアノを弾いていると、「USMC（合衆国海兵隊）」（p83）という文字の刺青を腕に入れている「元海兵隊員」（p85）の「大柄の白人の男」（p82）から発せられた挑発的な言葉を耳にした。

> なあ、どうして日本人は自分の国を守るために戦おうとしないんだ？なんで俺たちがイワクニくんだりまで行って、あんたらを守ってやらなくちゃならないんだ？（p84）

[13] 実際、作品では、サカタは「母は兄のことを深く愛していたので、それ以来人が変わったようになったということです。私はもちろん変わってしまってからの母の姿しか知りません。それはとても心のいたむことです（p59）」と語っていることから、伯父が戦死したことによってもたらされた苦痛はサカタの母にとってはおそらく「死ぬまで残る傷」であることは想像に難くないであろう。

言うまでもなく、彼の怒りの矛先は、先の大戦における枢軸国の一つであるサチの母国、すなわち日本である。周知のように、第 2 次世界大戦終戦後、日本には GHQ による占領政策が実施され、1951 年の独立回復後も日米安全保障条約により、現在まで米軍が日本に駐留しているのが実情である。つまり、前述した元海兵隊員の発言には、前大戦で被害を受けたアメリカの軍隊が、その加害者であった日本を守らなければならないという、矛盾に対する怒りが含まれていると考えられるのである。しかし、先述したように、GHQ に占領された日本は、今でも自衛のための戦争さえ禁じられているため、「どうして日本人は自分の国を守るために戦おうとしないんだ？」という彼の問い自体は無意味な責任転嫁のように思えてならない。考えてみれば、彼が母国や家族を離れ、かつて敵国であった日本に駐留せざるをえない状況は母国であるアメリカによるアジア支配に起因している。そのため、本来彼の怒りの矛先はその母国であるアメリカの政策に向けられるべきで、被占領国でほかに選択の余地のない日本人に向ける筋合いのものでないはずである。そもそも海兵隊員としての強いアイデンティティーを象徴するかのような「USMC（合衆国海兵隊）」の刺青を持つ彼の口から発せられた上述した言葉には何らかのアイロニーが込められているように思われる。つまり、その言葉には海兵隊員でありながら、国の政策に内心、大きな困惑を感じていた彼の不安定な存在を垣間見ることができると言えよう。そして、この点からみれば、彼はいわばアメリカという覇権国家のもとで体制内で海外への駐留を命じられるという形で抑圧された犠牲者でもあると言えるのではないだろうか。

以上見てきたように、ハワイという作品の舞台設定、そしてサカタという日系人警官や元アメリカ海兵隊員といった登場人物設定には、総じて、国家の利益は、結局は国民の犠牲がなくては成り立たず、人間はその現実に直面せざるをえないという作者のメッセージが潜んでいるように思われるのであり、そこにもまた時代の運命に翻弄される様々な人間の姿が映し出されているのである。

3．サチと息子の関係をどう読み解くか

これまで見てきたように、日本人が背負っている“原罪”は、日本という国が発展していくための養分とも言えるものであろうが、一方で、人がもてあそばれる宿命でもあると言えよう。もちろん、国の発展には人々の力が必要であることは、日本だけでなく、アメリカにも当てはまるであろう。ただ、この作品におけるサチの自信なさや自己反省の描写からは、村上が一人の日本人として、日本もしくは日本人が抱えている「死ぬまで残る傷」を追究しようとする姿勢をうかがうことができると考える。続いては、こうした点について述べたいと思う。

サチは高校生になってからピアノを弾き始めた。ピアニストとしては相当遅いスタートであったが、「絶対音感が備わっていたし、耳も人並み外れてよかった」（p73）など、「ピアノを弾く才能が生まれつき自然に備わっていた」（p73）彼女に対して、音楽教師は「君には才能がある。勉強すれば、プロのピアニストになれるよ」（p74）と、その才能を評価している。しかし、サチは「自分自身の音楽を作り出すことができない」（p74）し、「楽譜を読むのが苦手」（p74）であるため、高校を卒業すると、家業を継ぐべく、料理の勉強を目的にシカゴへ留学した。シカゴでは、勉強をしながら小さなピアノ・バーでアルバイトとしてピアノを弾いていたが、料理の勉強より「ピアノの前に座っている方がずっと愉しかったし、らくだった」（p76）ので、結局は学校には行かなくなってしまう。そして、ピアノ・バーで 1 年半ほどピアノを弾いていたが、不法就労ということで日本へ強制送還されてしまうのである。「ピアノを弾く以外に生活方法は思いつけなかった」（p77）ため、帰国後も、さまざまな場所でピアノを弾いて生活費を稼いでいた。その後「荒削りではあるが、オリジナルな音楽的才能」（p77）を持つジャズ・ギタリストと 24 歳のときに結婚したが、夫が「別の女の部屋で、夜中に心臓発作を起こし」（p77-p78）死んでしまったため、結婚生活は 5 年しか続かなかった。シングルマザーになったサチは、仕事が忙しすぎたため、息子との

関係もおろそかになりがちであったが、その息子も異国の地で帰らぬ人となり、その悲しみを十数年以上も抱き続けていたのである。

このように、数奇ともいえるサチの運命であるが、ただ、そうした要因は彼女の自信なさにあると考えられる。相応の評価をされていたにも関わらずプロのピアニストになれそうもないと思い、好きでもない料理の勉強をするために海を渡ってアメリカへ行ったものの、それを成熟させることなく、結局は不法就労で強制送還されてしまう。自分にない音楽的才能を有する男性に引かれ、周囲の反対を押し切って結婚したものの、それも長くは続かなかった。そして、こうした描写からは、日本が明治維新から急速に推進した近代化により、本来の自身の文化を失い、いくら西洋の模倣をしても自分自身ではありえないという自己疎外の社会を生み出して、結果として日本人の社会的存在としての自信に大きな打撃を与えてしまったことが重ね見えるのである。アンドウ・シャーリー／宮川真子も日本の近代化が日本人のメンタリティーに与えた影響について、次のように述べている[14]。

> 明治維新ならびに、第二次世界大戦敗北が主な引き金となって、日本は欧米の文明に習った近代化を急速に推し進めた。その結果、民主的政治形態が確立し、科学技術や産業もめざましい発展を遂げた。経済も急速に発展し、多くの国民が物質的な豊かさを享受できるようになった。
>
> 反面、「欧米に追いつき追い越せ」のスローガンの下に始まった近代化の思想が、日本より欧米の方が優れていると考える傾向を生み、日本が自信と誇りを失ってしまったようだ。

つまり、近代化の結果、確かに日本という国は物質面、技術面で強くなり、経済的な発展を遂げて生活も豊かになったが、常に海外に手本を必要とするという模倣による近代化は人々が自国の文化に拠ってたつ精神的な基盤を喪失させ、国民の意識へのケアを蔑ろに

---

[14] アンドウ・シャーリー／宮川真子「日本の精神文化崩壊の分析と解決に関する二極的見地（上）」（『大手前大学論集 = Otemae Journal』2008.3）p1

したことにより、結果として自国の文化に対してアンビバレントな状態に常に置かれる自信に欠ける現代日本人的存在と意識が形成されるようになったと言えよう。そして、さらに言ってしまえば、こうした国と人との関係は、サチと息子との関係を彷彿とさせるかのようである。例えば、サチが亡くなった息子との過去を振り返りながら、深く内省している次のような描写が注目される。

> しかし正直なことを言えば、サチは自分の息子を、人間としてはあまり好きになれなかった。もちろん愛してはいた。世の中のほかの誰よりも大事に思ってはいた。しかし人間的には――それを自分で認めるまでにはずいぶん時間がかかったのだが――どうしても好意が持てなかった。もしあの子が血をわけた自分の息子でなかったら、まず近寄りもしないのではないかとサチは思った。（中略）私がたぶんあの子をスポイルしてしまったのだろう、と彼女は思う。小遣いも与えすぎたのかもしれない。もっと厳しく育てるべきだったのかもしれない。でもだからといって、具体的にどのように厳しくすればよかったのか、彼女にはわからない。仕事が忙しすぎたし、男の子の心理や身体についてまったく知識がなかった。（p80-p81）

サチは夫の死後、ピアノ・バーを開いて生活を営んでいた。その店は繁盛し、生活に不自由もない。ただ、仕事に多くの時間が奪われてしまうため、息子と接したり教育したりする時間的・精神的な余裕はなかったのであろう。そのかわりにサチは、息子の欲をできる限り満たすべく、金銭的・物質的な面で補おうとしたことが見て取れよう。母親としてのサチの立場からすれば、何の不自由もない生活を息子に与えることは最善の考えであったかもしれない。しかし、息子にとって最も大切で必要であったものは、母親の愛情であり、人間的な深い関係であったのではないだろうか。だが結果として、母子の関係は物質面、経済面だけに傾斜し、意識面では疎遠になり、意思の疎通を欠くことになってしまったのである。そして、こうした情景は、日本という国とそれを構成する人々との関係にも

当てはめて言うことができるのではないかと思われるのである。

周知のように、第 2 次世界大戦を敗戦で迎えた日本は、GHQ 占領下での経済的社会的再建を経て、高度経済成長期以降の驚異的な経済的発展を遂げ、いわゆるバブル経済の 1980 年の未曾有の好景気を迎えるようになった。そして、こうした物質面経済面に傾斜した社会の中心を担っていたのが当時 40 歳前後の働き盛りの世代である団塊の世代である [15]。団塊の世代は、村上春樹自身がそうであるが、狭義では 1945 年～1950 年の GHQ 占領期に生まれた日本人であり、日本では一種の繁栄の象徴としてメディアでステレオタイプが生み出された戦後世代である。サチもそうした一人として設定されている。しかし、繰り返しになるが、一途に経済発展の道を追求してきた日本は、一方で、ややもすれば国民のメンタリティーの問題を看過しがちだったことも否定できないであろう。言い換えれば、国が経済的利益を追求することに国家存立の基盤を固定した結果、そこに存在する人々は経済的富を生産するためだけの存在となって、その精神的基盤を顧みることは忘れられ、その結果、次第に顕著な社会的問題が顕在化するような現在の日本社会が形成され、それが今、人々に「死ぬまで残る傷」となるような不幸や苦しみをもたらしたり、国と国民との関係が疎遠になったり、対立的になったりする社会的葛藤を生み出していると言うことができると思われるのである。

4. 結びにかえて―「死ぬまで残る傷」を和らげられるか

これまで見てきたように、明治維新以来の日本は、対外的な力の強化や経済を発展させるために、ややもすれば国民を犠牲にすることが少なからずあったであろう。そして、そのことはまさしく村上が言う「死ぬまで残る傷」として、現在の日本人に痛みや苦しみを

[15] なお、サチが団塊の世代であるということは、以下の彼女と若者二人の会話からもうかがえる。「『おばさん、ひょっとしてダンカイでしょう？』と身長が言った。／『なに、ダンカイって？』／『団塊の世代』／『なんの世代でもない。私は私として生きているだけ。簡単にひとくくりにしないでほしいな』／『ほらね、そういうこと、やっぱダンカイっすよ』とずんぐりが言った。『すぐにムキになるとこなんか、うちの母親そっくりだもんな』」p70

与えるのであると考えられる。その上で村上は、その傷をどのように受け止め、いかに和らげられるのかということの可能性を、「ハナレイ・ベイ」において提示しているように思われるのである。この作品が収められている短編集『東京奇譚集』は作品集として「命の儚さ」が通底となっている。どんな形であれ、命がいずれ消えていくことはやむを得ないことであり、サチの息子もその例外ではない。ただ、失ったものを省みては悲しみにくれるだけであったサチは、日本人の若者二人とのやり取りを通して、再び命のつながりを獲得したのだと稿者は考える。最後に、これについて、以下に詳しく述べてみたい。

サチと若者二人とのつながりを作ったのは、サーフィンをしている二人の姿に彼女の死んだ息子の姿を重ねたことに起因している。無論、サチのこうした思いは、息子を亡くしてからの十数年の間、幾度もハナレイの町を訪れ、サーファーたちの姿を砂浜から眺め続けてきたといった、サーファーに対する感情の積み重ねとは無関係ではあるまい。

さらに、こうしたつながりは、サチ自身が熱中している音楽にも関連していると思われる。サチは若い頃から西洋音楽の一つであるジャズに接しており[16]、そのピアノ演奏に心を引かれている。一方、サチの息子にせよ、日本人の若者二人にせよ、サーフィンという西洋を主な起源とするスポーツに心を引かれ、遠くハナレイ湾への冒険の旅路に乗り出したのである。音楽もスポーツも一種の美学であり[17]、感情を発散したり表出したりする手段であると言えよう。つまり、サチと若者二人とのそれぞれの美学には、西洋という共通のキーがある。サチは、ヒッチハイクをしていた若者二人に助けの手

[16] 作品では、レッド・ガーランド、ビル・エヴァンズ、ウィントン・ケリーなどの、アメリカのジャズピアニストの名前が挙げられており、サチは「彼らの演奏を繰り返し聴いて、そっくりコピーした」（p74）という。

[17] 樋口聡は「体操競技やフィギュアスケートにおける人間の美しい身体運動とか、マラソンやバスケットボールの劇的な展開とか、スポーツに美的次元があることは確かである」と述べていることから、スポーツを一種の美学として認めることができる（「芸術からスポーツへ―美学の拡張の試み―」『芸術研究』1993.7、p33）。

を差し伸べたが、それは、彼らの中に息子の姿を見たからといった単純な理由からだけではなく、そこに共通の美学を見いだしたことで、若者二人と比較した場合のサチの地位の優位性や世代や年齢差といったものを超えたつながりを生じさせ、その結果としてサチの彼らに対する寛容性や交流が現れるようになったことを、作品描写の随所から読み取ることができる[18]。

また、先に述べたように、サチは血がつながっている息子のことを親子として認めてはいるものの、彼の人間性について好意的に受け入れることができなかった。つまり、彼女は息子を、人と人とのつながりとして受け入れることができなかったのである。しかし、息子を亡くし、さらに十数年という時の流れの中で、毎年のようにハナレイの町を訪れることにより、サチは息子のことを少しでも理解しようと努めたのであろう。おそらく彼女は、砂浜でサーファーたちの姿を眺めながら、息子との過去を振り返り、深く自省をしたのだろう。そして、かつて息子に対して持っていなかった理解や寛容を、若者二人とのやり取りに見ることができるようになったのは、サチにとっての大きな変化とも言えるものであろう。

なお、主人公であるサチの心を強く引いたジャズであるが、作者である村上自身も小学生の頃に近所の大学生を通じてジャズを知り、15 歳からジャズを聴き始めたという[19]ことである。そして、作家としてデビューする前に、村上がジャズバーを経営していたということも彼の読者であれば多くの人が知っている事実であろう。ただ、本作を含め村上作品には少なからず登場するジャズであるが、今日においてはアメリカ社会でも高く評価され、音楽の主流文化の一つとして世界に広まっているものの、発祥当初はアメリカの黒人社会

---

[18] たとえば、「カパイという町で、ヒッチハイクをしている」（p 64）若者二人に手助けをして、宿泊先を見つけてあげた上、料金を安くしてもらうようにコテージのマネージャーにお願いしてあげたこと、また、ハナレイのレストランで食事をしている若者二人が元アメリカ海軍隊員に軽蔑の言葉を発せられたのを見て、二人の代わりに言い返してあげたこと、などが挙げられる。

[19] 太田鈴子「村上春樹作品における音楽―『風の歌を聴け』から『ダンス・ダンス・ダンス』まで―」（『學苑』2012.11）p30

で生まれ、抑圧された人々にのみ受け入れられるマイノリティーの音楽であった。

そして、作品の終盤では、サチは毎晩のように「８８個の象牙色と黒の鍵盤の前に座り、おおむね自動的に指を動かす。そのあいだほかのことは何も考えない」（p93-p94）と記されている。おそらく彼女は、ピアノを弾くことでしか、息子を亡くした悲しみを乗り越える手だてがなかったのかもしれない。ただ、息子の死がなければ、理解性や寛容性を持つ今のサチは存在し得なかったとも考えられよう。そして、こうした見方は、国民や人々の犠牲がなければ日本や社会が遂げた今日の発展も存在しなかったのではないかという考えにつながり得るものと思う。

繰り返しになるが、日本には経済的利益の追求を優先するあまり、そこに暮らす人々の犠牲を省みない風潮があったことは否めない。むろん、こうした傾向は、日本をはじめとした国家という枠組においても同様であるかもしれない。そして、そこに生きる人々は、国のそうした姿勢に憤りを覚えたり失望したりするであろう。ただ、仕事に明け暮れていたかつてのサチと息子との関係が疎遠であったものの、やはり、母と子という親子の絆で結ばれており、その結果、サチが大きな変貌を遂げたのと同様に、国家と国民とを結ぶ、絆と言うべきものがあり、それを再び見いだそうとすれば、何らかの変化がもたされる可能性があるという呼びかけを本作品から読み取ることができると考えられる。だが、国家と国民との結び付きといっても、受け止め方は各人各様であり、言葉で表すことも難しい。そこで村上春樹は、「ハナレイ・ベイ」においては母子という言葉では言い表せない宿命的な関係を描くことで、国家と国家の中で忘れられつつある国民の間の絆を想起させようとしたように思われるのである。その点では、この作品はまさに村上春樹文学における社会的コミットメントを象徴する作品であろう。村上春樹作品における社会的コミットメントは、直接的描写や談話に拠る強制性強迫性をもたない、今回見たような作品内で構成された言説を読み取ることで

初めて浮かび上がるような、密やかな形式で語りかけられている内言であるとも言える。

なお、この作品を彩るピアノ演奏にせよ、サーフィンにせよ、経済的利益の追求や生産性などの観点から見れば、直接的に社会に寄与しない行為かもしれない。だが、美の表現の一つである音楽や、スポーツという美学に属するサーフィンといったものは、自己実現につながるものであると同時に心を豊かにする働きも持っていると考えられよう。そして、こうした美やそれによって培われる心の豊かさなどが、経済的利益中心の体制から必然的に生み出される「死ぬまで残る傷」を和らげる良薬になりえると村上は考えているとも言えるのではないだろうか。

また、こうした美に対する共鳴は、性別・人種・年齢・国籍を問わず受け入れられやすいものであろうし、美に基づく文化の融合こそが、国と国あるいは、人と人との関係における交流のあるべき姿なのだ、ということを本作品において村上が提起しているようにも思われるのである。そして、そのプロットに、多くの人に国境を越えて広く受け止められる美的感性的領域を含めるという村上の作風は、幅広く世界の人々に受け入れられる理由の一つでもあり、このような視点から考えれば、ちょうど戦後 60 周年に発表されたこの作品の持つ、特別な意味を垣間見ることができるのではないかと考えられるのである。

テキスト

村上春樹（2007）『東京奇譚集』新潮社

〔付記〕本稿は第八回村上春樹国際シンポジウム（2019 年 7 月 21 日～22 日　於日本・札幌）における発表内容に加筆・訂正を施したものである。

参考文献

（日本語）

天沼香（1988）「福沢諭吉の移民観：その女性観と関連させながら」『東海女子大学紀要』

アンドウ・シャーリー／宮川真子（2008）「日本の精神文化崩壊の分析と解決に関する二極的見地（上）」『大手前大学論集 = Otemae Journal』

太田鈴子（2012）「村上春樹作品における音楽―『風の歌を聴け』から『ダンス・ダンス・ダンス』まで―」『學苑』

重岡徹（2006）「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』

津久井伸子（2007）「村上春樹『東京奇譚集』―家族という呪縛―」『宇大国語論究』

佃陽子（2015）「ハワイにおける現代の日本人移住者の移動性と「移民性」」『教養論集』

樋口聡（1993）は「芸術からスポーツへ―美学の拡張の試み―」『芸術研究』

村上春樹研究会他編（2007）『村上春樹　作品研究事典（増補版）』鼎書房

矢口祐人（2002）『ハワイの歴史と文化』中央公論新社

矢口祐人（2011）『憧れのハワイ―日本人のハワイ観―』中央公論新社

（中国語）

張素玢（2017）『未竟的殖民:日本在臺移民村』衛城出版

インターネット資料

「HARUKI MURAKAMI ON PARALLEL REALITIES」

https://www.newyorker.com/books/this-week-in-fiction/haruki-murakami-2018-09-03（2020 年 8 月 13 日最終閲覧）

「村上春樹のパラレル・リアリティ（NEW YORKER インタビュー翻訳）」https://note.mu/masatonic/n/nc43379f7598c（2020 年 8 月 13 日最終閲覧）